和歌山と恋しよう

趙亜丹
交換留学生　中国

大きな振動で目を覚ました。瞼を開けると、見慣れたものが目の前にあった。それが揺れたバスの手すりということに気づき、しばらく後、朝出かけて和歌山大学へ行く途中であったことを思い出した。

バスに暖かい日差しが溢れ、乗客の服を黄金色を染めた。車内の人々は睡魔に襲われ、手すりのようにリズムに従って揺れている。「もう、一ヶ月たったのだったなあ」と独り言を言いながら、私はもう一度目を閉じ、椅子に腰をうずめた。この静かな町は海辺の少女のように、斜陽と共に輝いている。

「いつ惚れたのかなあ」私はいつのまにかこの町が好きになった。

不思議なことに、和歌山との最初の出会いは今でもしっかり覚えている。四月一日に、飛行機を怖がりながらも私はようやく日本の土にたどり着いた。しかし、一刻の余裕もなく、私たち三人は和歌山への電車に乗った。電車の窓から外を眺めた。みさき公園経過すると、あたり一面が畑で、反対側が色褪せた古い日本建物が建ち並んでいる。遠くには澄んだ海水が見える。

「もうすぐだろう」。友たちが突然立ち上がった。「和歌山ってどんな町でしょう」と友は頭を下げながら私に話しかけた。私は沈黙したままだった。家族と離れて、異国の町で新しい生活を始める体験をしたことがなかったからだ。不安と好奇心を抱いて、私たちは電車を降りた。雨が降り始めた。和歌山は目の前にあった。

閑静な御屋敷町、と言った風景だった。少し傾斜を含んだ道路を挟むのは長く伸びた生け垣だ。どの家も小さな庭を持っている。大通りの車の音はほとんど聞こえてこない。雨のせいか、道で歩いている人は私たち三人しかいない。

少し歩くと、小雨になった。遠くを眺めると、灰色の空が背景に、緑色の山影が浮かんでいる。20 分ほどで、私たちはようやく寮にたどり着いた。友だちの八階の部屋へ向かう途中で雨が止んだ。太陽が重く垂れ込めた雲の後ろから顔を出した。一瞬で、色褪せた町が黄金色に染められ、少女の笑顔のように輝き、私の心を捉えた。この風景と比べられるものは存在しない。この風景を見て、不安も孤独もあっという間にきえさって

いく。「異国でも、このような風景があれば、きっと大丈夫だ。」私はそう思う。
　でも、時がたつにつれて、私が最も好きな「風景」はそれだけではなくなった。お花見会で留学生たちと Win コンコード支援団体の皆さんの笑顔、国際連携部門のスタッフさんからかけられる声、アルバイトで元気に挨拶するコンビニの店長さん。これこそ、和歌山の生きている風景だ。だから、私は和歌山に好きになった。
　和歌山と出会って、良かった。